

寄稿 東海経済がもたらす日本の活力



箕浦 宗吉 (みのうら そうきち)
名古屋商工会議所 会頭
財2005年日本国際博覧会協会 副会長

1. 東海経済・これまでの軌跡

愛知・名古屋を中心とする東海地域は、これまで木材加工、陶磁器、繊維、航空機、自動車、工作機械など、それぞれの時代のリーディング産業を育み、現在に至るまでモノづくりのメッカとしてわが国の産業発展に大きく貢献してきた。とりわけ、愛知県は、製造品出荷額で27年連続して日本一の座を保っている。

東海の産業史をいま少し^{ひもと}くと、江戸時代、名古屋は豊富な木材生産地である木曾地域を背後に擁し、木材の一大流通拠点を形成し、木材加工業が発展した。その後、豊富な木材を基に、からくり人形、掛け時計などの独自の製品・技術を創り出し、さらに合板、鉄道車輛、楽器などの新たな産業を発展させた。

また、江戸期に知多木綿が江戸に送られた歴史があり、それ以降明治初期までは農家の副業として織物産業が発展した。そして、明治から大正にかけて豊田佐吉翁がG型自動織機をはじめ数々の優れた発明をしたことにより、繊維産業は飛躍的な発展を遂げることとなった。またこの時期、瀬戸、常滑、美濃、四日市などの良質な陶土を利用した陶磁器産業が発展し、これが現在のファインセラミックス産業につながっている。

こうした軽工業に加えて、木材加工技術をベースとした機械産業の発展や、繊維機械などの加工技術が、当時としては世界第一級の航空機の製造につながり、わが国の航空機生産の中心地を形成していった。

戦後から昭和30年代にかけては、戦前から続く繊維産業がリーデ

イング産業として戦後の復興を支えた。また、繊維機械産業、航空機産業で培われた技術を応用することで自動車産業などの機械産業が勃興した。その後、高度成長時代に入り、積極的に工業用地の造成や港湾の整備を進め、四日市コンビナートや名古屋港を中心として化学、製鉄業などの重化学工業が立地し、発展した。昭和40年代以降は、自動車産業が興隆し、東海の自動車産業がリーディング産業としてわが国経済を担っていくこととなる。

このように、東海経済は、繊維などの軽工業から重化学工業、さらには加工組立型工業へと産業構造の転換を図り、オイルショック、円高、さらには「失われた10年」とも称されるバブル崩壊後の長期不況など幾たびの危機を克服しながら、現在の豊かな経済圏を創り上げ、世界に類を見ないわが国の発展を支えてきたと言える。

2. 東海経済のいま

(1) モノづくりと中小企業

以上のように、東海の産業史を概観すると、東海の産業の歩みは「モノづくり」そのものの歴史である。この背景には、「匠」に代表される技術の蓄積、起業家などの優秀な人材の輩出、時代を先取りする進取の気風などがある。

こうした「モノづくり」を世界的なブランドにしようと、名古屋商工会議所では、とくに中小企業に焦点を当て、平成14年度（2002年度）から3年間にわたって、「めざせ『小さな世界企業』」をキャッチフレーズに、「モノづくりブランドNAGOYA」事業を行っている。

これは、東海三県の中小製造業の中からキラリと光る独自の技術・技能で飛躍を続ける中小

企業を発掘し、世界にアピールするものである。

この事業を通じて、東海地域の中小企業の豊かな技術集積と技術水準の高さを再認識するとともに、こうした優れた中小企業群のパートナーシップがあればこそ、新しい時代を拓き、時代をリードする産業が興るものだと感深くしている。

(2) 空港、万博二大プロジェクトの経済波及効果

去る2月17日に「中部国際空港」（セントレア）がオープンし、待ちに待った「愛・地球博」（愛知万博）が3月25日に開幕する。

愛知県の調査によると、二大プロジェクトにより、約2兆2,000億円を超える経済効果と22,000人を超える雇用効果が見込まれており、東海経済の活性化に大きく寄与するものと期待される。

一足先に開港した「中部国際空港」（セントレア）は、東海地域の世界に向けた新たなゲートウェイであり、ユニバーサルデザインを駆使した人に優しい空港である。開港に至るまでの大変なコスト削減努力が全国的にも有名となり、今後のわが国における大型プロジェクトの最良のモデルになると言えるものである。

また、24時間運用であり、週300便を上回る見込みの国際線就航便数と、多くの国内空港とも連絡することにより、旅客の面はもとより、第2東名・名神高速道路や東海環状自動車道などのアクセス整備とも相俟^{あいま}って、物流の面でも大きな変革をもたらし、日本全体の航空旅客貨物需要の拡大につながっていくだろう。

一方、「愛・地球博」（愛知万博）が、いよいよ3月25日から半年間、世界120カ国、4国際機関の参加を得て、「自然の叡智」をテーマに開

催される。この「愛・地球博」(愛知万博)に名古屋商工会議所では開幕から1ヵ月間、長久手会場のモリゾー・キッコロメッセに、「モノづくりランド シンフォニア」を出展する。中小企業の皆さんを中心に70社が持てる技術の粋を、「花」と「おもちゃ」をテーマに展示するものである。恐らく、万博の歴史の中で中小企業の出展は初めてであろうが、この機会を通じて当地域の「モノづくり」の「こころ」と「文化」を世界に発信したいと考えている。

そして、国の内外からの、多くの方々が、私どものパビリオンをはじめ、「愛・地球博」を楽しくご覧になり、よい思い出をお土産にお帰りいただくよう、地元を挙げて「おもてなしの精神」でお迎えしたいと思っている。

いずれにしても、二大プロジェクトは、愛知・名古屋を中心とする東海地域を世界にアピールする絶好の機会であるとともに、経済に止まらず、文化の面でも次の「飛躍」へのマイルストーンとなるものであり、是非とも成功させたいと願っている。

(3) 産業観光への取り組み

観光とは、一般に「名所・旧跡や風光明媚な景色をみること」というイメージを持たれているが、最近では、見るだけの観光から、体験や知的好奇心を満たす観光へと対象が広がっている。

東海地域には最先端の産業から職人の技が光る伝統産業まで、それぞれの歴史や技術を紹介する博物館、資料館が数多くあり、単なる展示だけではなく、作陶や絵付け、有松絞りのハンカチ作製やお酒の試飲、航空シミュレーションの操作など、楽しみながらモノづくりの心に触れていただく工夫が凝らされている。

名古屋商工会議所では、こうした博物館・資料館や稼働中の工場などを観光資源とする新しい観光スタイルを「産業観光」と名付け、推進活動を展開しており、いまでは「産業観光発祥の地 名古屋」と言われるほどに定着している。

「愛・地球博」(愛知万博)に合わせ、内外から多くの方々に産業観光施設を訪れていただき、東海地域のモノづくりの歴史や神髄、さらにはそれらを育んだ都市や地域の魅力に触れていただくよう期待している。

(4) 「名古屋元気論」を考える

最近では、多くの方から「名古屋は元気がいい」と声をかけていただく機会が多くなった。しかしながら、リーディング産業である自動車や工作機械などの一部の業種は大変好調であるが、名古屋経済に限ってみても、とりわけ中小企業ではまだまだ言われているほどの明るさは見えてきていないというのが率直な気持ちであり、こうしたお褒めの言葉をいただくと、いささか面映ゆい気がする。

確かに、例えば雇用情勢などをみると、他の地域に比べれば良い数字が出ているが、強いて「名古屋元気論」の要因を挙げるとすれば、二大プロジェクトの効果もさることながら、東海地区の企業が激変する経済環境の中でも地道に努力を積み重ねた成果が、いま実を結んでいるのではないかと思う。

今後とも、経済界としてこうした声に甘え、^{おこ}驕ることなく、行政などと協調連携し、東海経済を着実に前進させていくことが大切であると思っている。

3. 東海経済・新たな発展ベクトル

(1) 二大プロジェクト後の発展方向

世界・全国と直結する「中部国際空港」(セントレア)の開港に続き、環境をテーマとする「愛・地球博」(愛知万博)の開催は、東海地域の新たな「飛躍」へのまたとない機会である。

「中部国際空港」(セントレア)に象徴されるように、交通基盤、産業基盤などインフラ整備が着々と進む中で、「愛・地球博」(愛知万博)の成果、理念を生かした、都市づくり、地域づくりが二大プロジェクト後の東海地域の課題である。

そのめざすべき方向性として、「産業・頭脳創造圏域」、「世界との交流圏域」、そして「未来志向の環境共生圏域」の三つを提示したい。

(2) バランスの取れた産業・頭脳集積の形成

21世紀においても引き続きわが国をリードする産業・頭脳集積を形成していくためには、何よりも経済力の基盤であり、東海地域の強みである「モノづくり」を中心とする既存産業をさらにステップアップしていくことが肝要である。同時に、中小企業の技術力、開発力も高めていかねばならない。

これに加えて、輸送用機械を中心に、裾野の広い産業技術の集積を活用し、産学官がスクラムを組んで、そのシナジー効果を遺憾なく発揮し、時代を拓くと期待される環境、バイオ、新素材、ナノテクノロジーなどの新たな技術開発、新産業創造に果敢に挑戦していかねばならない。

さらにまた、私は、二大プロジェクトがこの地域にソフトな産業を根付かせていく大きな契機になるのではないかと思う。

モノづくり産業や、今後当地への立地が期待される外国企業をサポートする情報、サービスをはじめ、知恵やアイデアを生かす都市型の産業も大いに振興し、バランスのとれた産業・頭脳構造の形成を強力に進めていきたいと考えている。

(3) 活力ある中小企業群の創造

知恵やアイデアを生かす都市型産業という面では、中小企業が活躍できる分野が大いに広がると思う。名古屋市内においても長期不況や産業の空洞化などにより、事業所数が減少しているが、人口が国力のバロメーターであるように、事業所の数は地域の活力の大きな要素である。

名古屋商工会議所では、5年前に中小企業支援センターを設置し、中小企業の創業をサポートしているが、これまでに、約230社が創業を果たし、逐年その数も増加している。

商法の改正で、「一円創業」が恒久化される方向の中で、より多くの活力と創造性に満ちた中小企業が生まれ、都市型産業の分野をはじめ、いろいろな産業分野で活躍し、地域の活力を高めていただきたいと願っている。

(4) 世界的な交流圏、

「世界都市・名古屋」の実現

二大プロジェクトは同時に、東海地域が名実ともに世界的な交流圏に向かう、大いなる一歩であると思う。その中で、名古屋は世界の各地から人々が集い、経済的、文化的な交流が日常的になされ、そして世界に情報が発信される「世界都市」をめざしていきたい。

その実現のためには、万博で当地を訪れる1,500万、あるいは2,000万人といわれる国内外

の人々が今後2度、3度と当地に足を運んでいた
だけのようにリピート戦略を考えていかねばなら
ない。

具体的には、産業分野では例えば「メッセ」
の開催などが考えられよう。従来の見本市とい
う概念ではなく、これにソフトパワーを加え、
リフォームし、魅力的な形で定期的に開催し、
当地からアジアを中心に世界に情報を発信した
いと思っている。

ソフトな戦略としては、万博のような世界の
耳目を集める世界的なイベント、コンベンショ
ンを積極的に誘致し、開催を実現していきたい。

また、観光を産業としてだけではなく、世界
的な交流圏や「世界都市」づくりを進める重要
な手段として振興する視点が重要である。当地
では、全国に先駆けて産業観光に取り組んでい
るが、近代日本を創った多くの武将を輩出した
土地柄であり、豊かな歴史や文化に恵まれてい
ることから、今後は歴史・文化観光や都市観光
にも力を注ぎ、広く観光を振興していきたいと
考えている。

(5) 未来志向の環境共生圏づくり

東海地域は、かつて公害を克服した経験を持
ち、環境対策の面では先進地域と言えるが、こ
の地で、環境を大きなテーマとする「愛・地球
博」（愛知万博）が開催されることは、地域と
して新しい環境技術の実践や環境改善に向けた
取り組みをさらに進めるうえで、意義は極めて
大きい。

私どもは、「愛・地球博」（愛知万博）の開催
を通して、循環型の産業構造の構築や、自然と
共生した快適な生活環境、環境に配慮したライ
フスタイルの確立を進め、その成果を内外に発

信し、「環境の世紀」と言われる21世紀におい
て、世界的な環境との共生のモデル地域をめざ
し、わが国、さらには世界に貢献していきたい
と考えている。

4. 21世紀日本の再生・飛躍への貢献

わが国経済は、景気回復の裾野が広がりつつ
あるとはいえ、中小企業にはまだまだ景気回復
の効果が十分及んでおらず、依然として厳しい
経営環境にある。

バブルの崩壊に続く「失われた10年」を経て、
今ようやく長いトンネルを抜けつつあるが、先
行きにはなお不透明感が漂っている。

こうした中で、東海地域では、長年の夢であ
った二大プロジェクトが花開き、大きな「飛躍」
のときを迎えている。

多くの地域が、なお景気回復を実感できず呻
吟^{げん}する中で、こうしたときこそ、私どもは二大
プロジェクトの成果を生かし、そのエネルギー
を持続、発展させ、21世紀の日本の再生、飛躍
に向けてそのフロントランナーとしての役割を
担っていかねばならないと考えている。

東京一極集中の弊害が叫ばれて久しいが、地
方の時代と言われるそれぞれの地域がアイデン
ティティを生かし、さらなる発展をめざすこと
が、多様で調和のとれた国土の形成につながる
ものと言える。

東海地域は、今後とも「モノづくり」という
伝統を大切にしながら、産業、技術、文化、芸
術など各方面で多様な発展を追求し、関西圏を
はじめ、各地域とも競争、協調、連携し、21世
紀日本の新たな針路を切り拓いていきたいと考
えている。